# 捕鳥部萬と忠犬シロの物語（八田町）

むかし、むかし、聖徳太子のお父さん（用明天皇）が亡くなった587年頃のお話です。

その頃、日本の国には、仏の教えが伝わってきていましたが、このことを受け入れる蘇我馬子と、今までどおり神だけをまつりたいという物部守屋との争いは、だんだん激しくなっていきました。この物部守屋の軍の中で、ひときわ勇ましく、そして、力も強いと言われていたのが、この物語の主人公である捕鳥部萬でした。

稲穂がたわわに実るある晴れた秋の日のことです。飛鳥の地には、続々と兵が集まってきていました。蘇我馬子の兵です。そして、数百人が集まると、蘇我馬子は大きな声でいいました。

「今から、物部守屋を攻める。一人も逃すな。」

兵たちは、いっせいに「おーっ」と、大きな声で答えました。

そして、夜の間に、物音をたてないようにして、山を越え、河内の国に入りました。そして、夜明けに物部守屋の陣に襲いかかりました。

「うおー」というさけび声の中で、矢が飛びかい刀と刀のぶつかる音の中で血が流れ、討ち死にする人が増えていきました。不意打ちを食らった守屋の軍は、もう全滅に近いありさまでしたが、その中でめざましい働きをしている一人の武士と一匹の白い大きな犬がいました。それこそが、百人隊長の捕鳥部萬と萬がたいそうかわいがっていた愛犬シロでした。

捕鳥部萬は、つぎつぎと敵を倒し、たった一人で十人分以上の働きをしましたが、愛犬シロも主人の萬に

負けないくらいの大きな働きをしました。ある時は、敵に吠えかかって敵をこわがらせましたし、ある時は、後ろから主人に切りかかろうとする敵の足にかみついたりしました。

しかし、蘇我馬子の軍は、あまりにも人数が多く、とうとう物部守屋の兵は萬一人となってしまいました。

萬はやむなく愛犬シロに言いました。

「シロ、こうなっては仕方がない。ふるさとの村へ帰ろう。」

シロも悲しそうな声で「クゥーン」と鳴きました。

萬はシロの傷を洗い、薬を塗りこんで、傷口の手当てをしました。そして、疲れ切っているシロを抱いたまま、馬にまたがり、肩を落として岸和田まで来ました。もうそのころにはシロも気分が良くなったのか、自分の足で元気に馬の横を歩いていました。

実は、死を覚悟した萬にも一つ心残りがありました。それは、一度、妻や子に会って今生の別れをしておきたいということでした。そこで、妻や子のいる有真香村（現在の岸和田市八田町周辺）で一夜を過ごし、体を休め、静かに別れを告げました。

「私は戦に敗れ、大勢の敵に追われている。おそらく、もう二度と生きて会うことはあるまい。皆で助け合いながら達者で暮らせよ。」

シロもその様子をさびしそうに見ていました。

明くる朝、葛城山の峰々が紫金色に輝く頃、萬は身支度をしっかりとととのえて、近くの丘に登りました。そして、小高い丘のいただきで、周りを見わたしますと、敵はすでにぎっしりと丘の周りを埋めつくしていました。その数は数百人ありそうで、萬はたった一人です。そこで、萬は覚悟を決めて、シロに言いました。

「シロ、命のかぎりがんばるが、多勢に無勢、とうていかなうものではあるまい。私が死ねば、シロはまた、新しい人に飼ってもらい、かわいがってもらえよ。」

シロは、萬の言葉が分かったのか、尾をたれて「ウォーン」と低く一声鳴きました。

その間にも、敵は、じわじわ丘に迫ってきます。そして、シロが「ウーワン」と吠えたのを合図に、萬は、弓に矢をつがえ、次から次へと放ちました。敵からも、まるで雨のように矢が降ってきます。萬は、百本の矢で百人の敵を倒しましたが、とうとう矢も打ちつくしてしまいました。そこで今度は刀を持って、右に左に走り、敵を倒していきました。シロもがんばって何人もの敵の足にかみつき、萬を助けました。しかし、そのころにはさすがの萬も体のあちこちに矢がささり、傷を受け、疲れ切って目もかすんできました。

ついに萬は、自分の最期が迫っていることを悟りました。そこで、シロを呼び、だきしめながら、頭をゆっくりとなでてやりました。そして、にっこり笑うと、最後の力をふりしぼって、仁王立ちになり、自分の弓を三つに折ってから、敵に向かって大きな声で言いました。

「おまえたち、よく聞け。この世の中で、一番大切なことは、信念を持ち、いつまでも誠意を持ち続けるということじゃ。私は、この世でも、あの世でも、変わらず帝を守るぞ。」

そして、自分の刀を自分の首に突き刺して自害（自殺）しました。集まってきた敵は、萬の首を切り落と

し、これを、「さらし首」にしました。

この時、シロは、吠えもせず、鳴きもせず、尻尾をたれて、首が「さらし首」になるのを、悲しそうに見ていましたが、しばらくして人々の目が「さらし首」から離れたすきに、すばやくその首をくわえて、どこかに行ってしまいました。

それから、一週間ほどがたちました。シロと萬の首を探していた村人の一人が、古い塚の穴ぐらの奥で、萬の首を抱きかかえるように死んでいるシロを見つけました。

村人は、それを見て、

「シロや、シロや、お前は、さらされている萬さまの首を悲しんで、ここまで持ってきたのかよう。そしてその萬さまの首を守って七日もの間、飲まず食わずでとうとう飢え死にしてしまったんかよう。ああ、かわいそうになあ。かわいそうになあ。」

「お前の主人も偉かったが、お前もそれに負けんくらいに偉かったなあ。」

と、涙をぽろぽろ流しながらいいました。

やがて、このことが都に伝わると、朝廷は、

「哀れな犬よ。恩を忘れぬ感心な犬よ。」

と、ほめたたえ、萬の墓と犬の墓を作って葬るように言いました。

それから、千数百年の年月が流れましたが、今も、天神山の丘の上には萬の墓、隣の丘にはシロの墓（萬家犬塚）がまつられており、二つの墓には、花を供える人の絶えることがありません。

（原話＝『日本古典文学大系68 日本書紀 下』岩波書店）